

## 第2章 ファーマーフィールドスクール(FFS)

表2-1 ファーマーフィールドスクール(FFS)関連用語表

AESA アエサ	Agro-Ecosystem Analysis(農業生態学的分析)の略。FFS グループで設置した小規模の学習圃場で毎行われる理学的観察のこと。
Back Stopping(B/S) バックストップング/補強活動	FFS ファシリテーターさまざまな技量(農民との接し方、技術的知見など)について、監督者が定期的に FFS 現場に出向いて行う監督と改善指導のこと。FFS の質はファシリテーターの技量に負う面が多く、また、ファシリテーションといった対人スキルを身につけには時間がかかるもので、特に経験の浅いファシリテーターには、手厚い B/S を実施することが必須である。
Extension Run(Ex-Run) 普及員ラン	ケニア森林公社〔Kenya Forest Service : KFS (当時はケニア森林局“Forest Department : FD)〕や農業局の普及員などの直営で実施する FFS。通常、普及員ランの FFS 卒業生の中から優秀者を選別して農民ファシリテーターを養成する。
Facilitator ファシリテーター	FFS を実施する上で要となる存在。「普及員」という和訳が当てはまるが、業務は「指導」や「教授」ではなく、「助長」という表現が最適。FFS という学校の生徒である農民たちの潜在能力を引き出し、「気付き」を促し、自助努力による技術開発が持続的に継続されるようにもっていく。
Farmer Facilitator (FF) 農民ファシリテーター	農民ファシリテーター(普及員)。普及員ラン(Ex-Run)による FFS を卒業した農民の中から、特に優秀な者を選抜し、ファシリテーター研修(Training of Facilitators : TOF)を受講させて、ファシリテーターとして養成した者。
Farmer Run(F-Run) ファーマーラン	農民ファシリテーターに委託して実施する FFS。
Host Farmer ホスト農家	FFS は平均して 20 人の参加者で構成されるが、実際の教室の場所(大きな樹の下など)と学習圃場の場所を提供してくれる農家のこと。
Micro Enterprise マイクロエンタープライズ	直訳すれば「極小規模(農地林業)事業」だが、「学習圃場」という方が実態を表す。ホスト農家の土地の一部(数アール)を借り受け、農民グループの自由意思に基づき、学習用の果樹園、木材や家畜飼料(樹葉)生産用のプロット、苗畑、養蜂場等を設定する。ここで FFS の期間中実施されるのが AESA。事業の選択肢や設置方法は「エンタープライズカタログ」として整備されている。
PTD(Participatory	AESA を通じて、土地にあわせた最適な栽培法等を、農民グループ各

Technical Development) 参加型技術開発	員の自主性に基づいて開発していく過程をいう。
-----------------------------------	------------------------

## 2-1 ファーマーフィールドスクール(FFS)の概要

### 2-1-1 FFS の発展と特徴

「壁のない学校～”School without Wall”」とも呼ばれる FFS は、1989 年に、国連食糧農業機関 (Food and Agriculture Organization of the United Nations : FAO) の支援によるインドネシアの稲作分野のプログラムで最初の試みが始まった。1970 年代にフィリピンで始められた総合的病虫害防除 (Integrated pest management : IPM) がその土台にある。当時、農薬の過剰使用による農業生態系の劣化と生産低下が危惧されていた。これを避けるため、天敵が活動しやすい圃場環境づくりや病虫害の侵入を防ぐ耕種法の導入などの環境負荷の少ない防除法と、適量の農薬使用による化学的防除を組み合わせた IPM を実践することで、農業生態系を保全しつつ生産向上を図る取り組み模索された。この際に、農民の自主学習を通じて得られた教訓や手法をシステム化して、FFS という普及手法が生みだされたのである。そして、これが成功し、FFS 手法による IPM が、コメから他の穀物や野菜、カカオなどの商業産品に急速に広がっていった。現在では、農業分野だけでなく、畜産、林業、農村の健康問題や HIV/AIDS 孤児の教育などあらゆるセクターのプログラムに導入されている。

地域的な広がりを見ると、FFS は IPM プログラムと連動しながら東南アジア諸国一帯に急速に広がっていき、アフリカでは 1995 年頃からケニアとガーナで導入された。現在、世界 90 カ国以上で FFS 手法を取り入れた活動が実施されている。実施機関も FFS を創始した FAO から、他の国連機関や二国間援助機関、途上国政府や NGO へと広がりを見せている。

インドネシアで FFS 手法を体系化した FAO の Kevin Gallagher 氏は「適切な教育とエンパワメントの機会を与えられることにより、農民は自分の将来あるべき姿に向かって、自分の意思により決断をすることができる」と述べている。成人教育のシステムとして、さまざまな要素を吸収して発展してきた FFS は、技術普及システムというより、複合的な教育とエンパワメントのプラットフォームだとも考えられている。

特定の技術について FFS を通じて学ぶことで、参加者は自己の可能性に目覚め、経済的な利益だけでなく、積極的に新しいことに取り組み、自分自身で問題を解決していくようになる。また、グループ活動を通じて、村落社会の組織強化や信頼関係の醸成、共通課題の処理能力が高まり、次のステップとしてコミュニティ主導による社会開発への道を開くことも可能である。こうしたことは、FFS 卒業後のグループが、自らの意思で自主学習や定期的な会合を継続することを決めたり<sup>40</sup>、FFS グループ同士でネットワークをつくり、協同組合を形成したりといった動きにもそのポテンシャルが見られる。

また、FFS を通じた技術普及に加えて、農村ビジネスを企画し運営する能力強化支援を行

<sup>40</sup> FFS メンバー間で自主的にセッションのファシリテーションをして、これまでの試験圃場での学習を継続したり、あるいは学習した事業を商業化し、その収益で外部のリソースパーソンに対価を支払い新たな技術移転指導を依頼するといったグループ自己出資による FFS (Self-Financed FFS) のケースがある。

うとともに、一般の金融機関を通じた小規模金融プログラムなどのコンポーネントと結びつけることにより、プロジェクトの支援が終了した後も、グループ事業の自立発展的な継続をはかることも可能である。こうした例は、本稿、ケニアの章で紹介する JICA 社会林業プロジェクトのスケールアップフェーズ<sup>41</sup>や、同プロジェクトをモデルに形成された FAO のマウ森林エリア持続的生計向上プロジェクト（Sustainable Livelihood Development in the Mau Forest Complex : SLDP）でも実践され、成果を挙げつつある。

FFS にはまた、マネジメント・ツールとしての側面もある。FFS はグループレベルでの活動スケジュール(実施曜日や時間割等)やユニットコストが明確に決まっていることから、普及事業を運営する側にとっては、活動計画づくりやモニタリング、パフォーマンスの評価が容易である。また、外部資金援助による FFS では、その実習活動や普及サービスの費用を、対象グループの銀行口座に直接振り込み、グループ自身で資材の調達などの予算執行や管理を行わせるといった方式を採るものもある。これにより、ドナーや実施機関は日常のロジをほとんど行う必要がなく、事業管理が容易になるだけでなく、グループにとっては、自分達で管理可能なファンドを得ることによって、事業へのオーナーシップが高まり、予算管理の方法を学習する絶好の機会を得ることになる。こうしたアレンジは、FFS 卒業にグループが自立して収入向上活動を展開していく準備フェーズとしても有益である。

さらに進んで、普及員の日当や燃料代についても、グループにデポジットされた資金の中から、グループ自身が支払うといったシステムを採用しているケースもある。この方法をとることで農民の普及コストに対する意識が高まり、有料サービスなのだからそれを有効に活用しようという気運が生まれる。普及員にとっては、グループへの訪問をさぼったりパフォーマンスが悪かったりすると、農民から日当の支払いを拒否される可能性もあり、普及員のモラルとサービスの質の向上にも役立っている。

### （1）FFS の特徴

FFS はその適用分野や地域的な広がりからみても明らかなように、非常に柔軟性に富んだシステムである。したがって、画一的な定義をすることは適当ではないかもしれないが、一般的に 20 人から 30 人の学習者がグループを構成し、週に 1 回程度の定められた活動日に村に設けた試験圃場に集まり、農・牧・林業などの日常的な共通課題について学習する。FFS の実施期間は対象とする作物や事業によって異なるが、通常半年から 1 年程度の耕作期間を通して継続的に行われる。そこでは普及しようとする技術そのものだけでなく、参加型技術開発（Participatory Technology Development : PTD）によって在来の手法との比較や、その技術にかかる事業の実施運営方法、経済性なども併せて学び、場合によっては、その地域の自然条件や資材の入手条件、農民生活にあわせて技術が修正されていく。最終的にどの技術や事業を選択するかは農民自身に任される。こうしたプロセスを経ることで、今後も発生し得る農村生活のさまざまな

<sup>41</sup> 半乾燥地ファームフォレストリー支援プロジェクト(SCBFFE)

問題に対する農民の課題対応能力、判断・意思決定能力の向上を図ることができる。このような、農民主体の観察・発見ベースの成人教育システムである FFS には以下のような特徴がある。

#### 1) 農民がエキスパート

FFS では普及対象となる作物や生計活動を、農民グループが村の中に設置した学習圃場で、実際に試してみながら知識や技術を習得することを目指している。学習の方法は、異なる耕作法や品種などの比較試験を行い、グループに合った技術を参加型で開発・検証していくものであり、そのプロセスも農業試験場の研究スタッフや普及員ではなく、あくまで農民が主体となって運営する。このようにして発見ベースで自ら選択・獲得した技術は、農民自身のものであり、農民はその技術のエキスパートということになる。

#### 2) 村の農地などが学習の場

すべての学習プロセスはグループが村の活動圏内に設置したホストファームで実施される。これにより小さな子どもがいる女性や、村から離れた研修所などに行けない人でも定期的なセッションに参加することが可能になる。参加者は小グループに分かれ、作物などを観察し、データを集めて分析したあと、グループとして結果を他のメンバーに発表して、問題点や対応策を討議する。

#### 3) 普及員は先生ではなく伴走者(ファシリテーター)

FFS では普及員は先生ではなくファシリテーターとして、参加者の学習プロセスを導き支援する「伴走者」のような役割を果たす。試験農地で発見したことなどを発表するのは学習者の農民であり、普及員が「授業」を行うのではない。さまざまな局面での技術の選択や活動の方向性はグループの総意で進められ、普及員はアドバイスや補足情報を伝える役にとどまる。

#### 4) 研究者・専門家も講師ではなく、共同研究者として

研究者や専門家(Subject Matter Specialist)も、農民グループによる自主学習の共同研究者・支援者として、必要に応じて知識を補足し、学習プロセスで相談に乗ったり、農民だけで対処できない問題に直面したときなどにアドバイスをするという立場にとどまる。

#### 5) 総合的なカリキュラム

FFS セッションには総合的なカリキュラムを組み込まれるようにデザインされている。例えば、特定の農作物・生計活動を学習テーマとする時でも、その地区独自

の生態系環境や社会経済条件なども総合的に検討・学習し、地域と参加者の実生活に合った生計活動パッケージを現場でつくりあげていくことを目指している。

#### 6) 研修は耕作期間・生産サイクルを通して続けられる

FFS は学習主題として選んだ特定の農作物等の耕作期間や IGA の生産サイクルを通して続けられる。単年性作物であれば地拵えから収穫までの数カ月から半年程度を学習サイクルとするが、果樹や樹木の育成のように長期的な投入とケアが必要な事業を含む場合は、そのメリットを参加者が実感できるところまでを学習サイクルとする。場合によっては数年を要することもある。

#### 7) 定期的なグループミーティング

FFS 参加者はメンバーで合意した特定の日に毎回、定期的集まって比較試験による学習を継続する。FFS セッションの期間と間隔は、対象となる農作物・樹木や生計活動の性質と種類、必要な活動内容に応じて柔軟に決められる。いずれの場合も、定期的なミーティングを続けることで、参加者の規律が正され、定期的に農地を観察するといった習慣が身につく。こうして観察眼を養った農民が、FFS 終了後も自分の農地を見て回ることで、病害虫の発生などの変化を早期発見できるようになるといった効果もある。

#### 8) 地域の教材を活用

FFS の試験圃場や投入物などの教材、観察記録などの図や絵も、学習者である農民自身が準備する。こうして用意された教材は、その地域で入手可能・活用可能なものに限られ、コストも抑えられる。何より学習者の能力や条件に合っているため、自由に使いこなすことができる。他ドナーの FFS では、教材購入のためのグラントを農民グループに直接提供し、メンバー自身に資材購入、調達をさせているケースもある。

#### 9) チームビルディングとエンパワーメント

FFS ではグループ活動を通じてメンバーのコミュニケーション能力や問題解決力、リーダーシップ、グループ討議やプレゼンテーションスキルの強化を図ることができる。学習するトピックにリーダーシップやグループ管理などの講義を含める場合もある。こうしたスキルは農民グループの総合的エンパワーメントにつながっている。

## 2-1-2 FFS の実施手順

標準的な FFS はおおむね以下のような実施手順に従って進められる。こうした手順やステップの大部分はマニュアルやガイドライン化されており、新たなプロジェクト、新たな地域での FFS の再現性を高めている。ただし FFS にはこうしたシステム化が可能な部分と、現場経験によって蓄積されるノウハウに基づく部分がある。したがって FFS セッションの品質維持のためには、実務経験を積み一定の資格要件を満たしたマスタートレーナーによるファシリテーター養成研修やバックストップング(補強活動)などの継続的な支援が不可欠である。

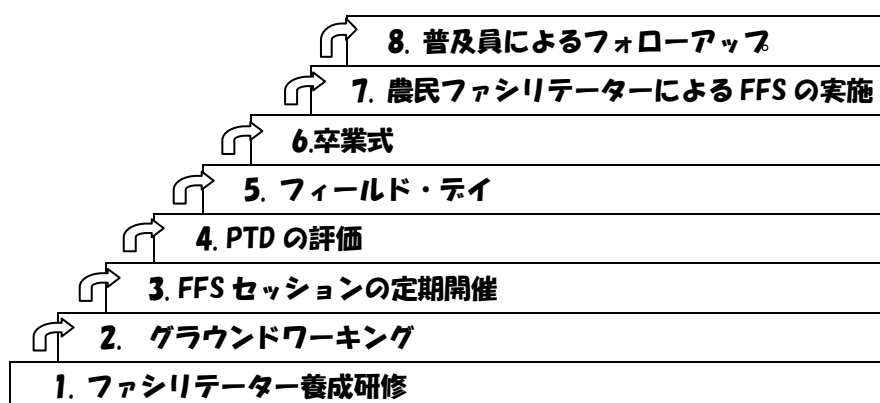


図 2-1 ファーマーフィールドスクールの標準的実施手順

### (1) ファシリテーター養成研修

TOT もしくは TOF のことである。FFS ファシリテーター候補となる普及員や農民に対して、FFS の概念や実施手順、農業生態系分析 (Agro-ecosystem Analysis : AESA) 手法や、PTD、ファシリテーション・スキルなどについて、FFS マスタートレーナーの資格をもった講師により研修を実施する。IPM プログラムで開発された FFS では、当初、農作物の一耕作期間という長期にわたるファシリテーター研修を実施していたが、政府普及機関による実施可能性を勘案し、2 週間から 3 週間程度の研修が一般的になってきている。



ホストファームの造成



大きな木の下の木陰が教室

## (2) グラウンドワーキング

FFS を新たに開校する際、事前に実施される根回し業務のことである。地方行政当局、関連機関、集落の長などに事前説明や現況聴取を行うほか、候補となるグループを選定し、学習対象となる事業(マイクロエンタープライズ)などを決定する。

## (3) FFS セッションの定期開催

FFS グループとメンバーを選定し、エンタープライズが決定されると、メンバーの1人から提供された学習のための農地(ホストファーム)において、PTD の計画が立てられる。メンバーは、毎週1回など定期的にホストファームに集まり、作物のサイクルを通じて観察と実験を継続する。詳しい FFS セッションの内容は2-1-3で述べる。

## (4) PTD の評価

メンバーは毎週、ホストファームの比較試験圃場において、作物の生育状況、病害虫の被害、その他の問題が発生していないか観察データを収集し、その内容を分析する。結果は小グループに分かれて他のメンバーに発表し、全員で気づいたことや対策案などを話し合う。収穫後には、対象となるマイクロエンタープライズの経済評価も行う。

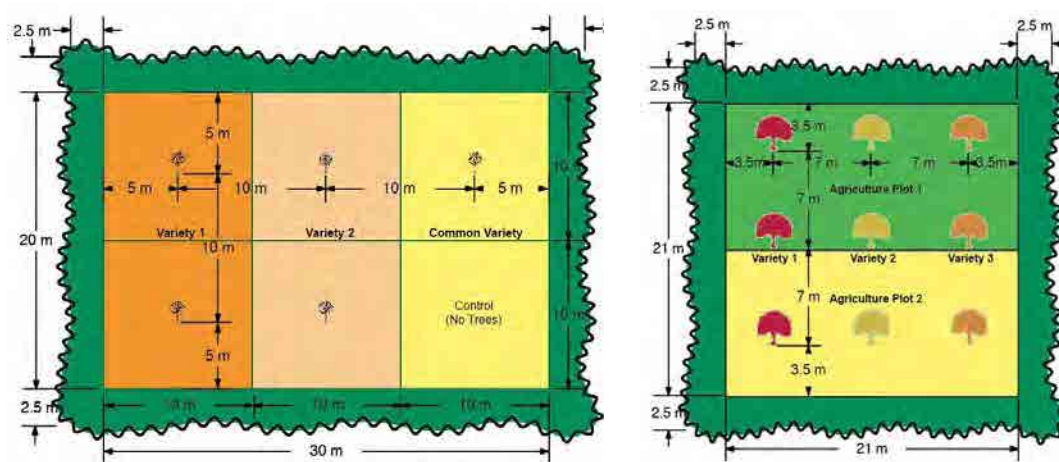


図 2-2 参加型技術開発 (PTD) プロットの例

## (5) フィールド・デイ (Field Day)

FFS 開校期間中に設ける「一般開放日」のことである。FFS のグループメンバーが日ごろの学習成果を近隣農家や各省の普及員、NGO 関係者などに発表する。これを通じて、FFS メンバーが修得した知識・技術が周辺農家に波及する効果が期待できる。また、このイベントを通じて、活動的で組織力のあるグループに対して、NGO などが追加支援を申し出たり、有能な農民ファシリテーターが新たなプログラムの普及要員として

雇用されたケースもある。

フィールド・デイに似た活動として、FFS ではエクスチェンジ・ヴィジット(Exchange Visit)と称し、異なる FFS グループ間の相互訪問交流イベントも行っている。活動の進んだ他グループの成果に刺激を受けたり、共通する問題点や課題について情報交換したり、相互のネットワークを形成するきっかけをつくる貴重な機会でもある。



普及局の「偉い人」に学習成果を発表



初めての卒業証書

#### (6) 卒業式

FFS 開講期間を通じて一定の出席日数を満たした農民に対し卒業証書が授与され、「農民エキスパート」として認定される。農民の中には正規の学校を卒業していない人もいて、彼等にとっては初めての卒業式であり、大きな自信につながる。卒業式は FFS グループ単位ではなく、通常、地域単位でその期の FFS 全校の卒業生が参集するとともに、地方行政当局や KFS の高官等が招かれ、卒業証書が来賓から 1 人ずつに手渡され、記念撮影も行われる。

卒業式では、フィールド・デイと同様に、FFS での活動成果などが発表され、同じような波及効果を狙えるイベントでもある。

#### (7) 農民ファシリテーターによる FFS の実施

普及員による FFS を卒業する予定の農民の中で、能力の高い者を農民ファシリテーターとして養成し、他のグループの FFS を運営させることで、より多くの裨益者に対して普及サービスを面的に展開していくことができる。政府の普及員は「読み書きができる」等必要な選考基準を提示し、FFS グループはその基準を満たし、自分達がファシリテーターとして適切だと思われるメンバーを選抜する。選抜・推薦されたメンバーは農民ファシリテーター育成研修を受講し、次のシーズンから他のグループの FFS に対するファシリテーションを開始する。この際、普及員は農民ファシリテーターの補強指導（バックストップング）を定期的の実施する。

農民ファシリテーターは、通常、普及員より安い日当でサービスを提供でき、かつ近隣に在住しているため交通手段を必要としないか、またはわずかな交通費の援助で



他のグループを訪問することができる。さらに、公務員のように異動がなく、その地域に住み続けるリソースであり、地域の農牧林業の現状に精通している場合もある。また、農民同士ということもあり、個人差はあるがピア・ラーニング(仲間同士の水平的な相互学習)を基本とする FFS では、普及員よりも上手くファシリテーションできることも多い。

#### (8) 普及員によるフォローアップ

農民ファシリテーターには、上記のようにいくつかの利点もあるが、林業関係の知識や技術に関しては森林普及員に対して劣っているのが普通である。また、FFS セッションの品質やエンパワーメントのレベルはファシリテーターのスキルに依存する部分が多いため、普及員などによるバックストップ支援は欠かせない活動である。

#### 2-1-3 FFS セッションの実際

FFS が開校すると、グループと普及員は特定の曜日を FFS の日と定め、ホストファームに隣接した一定の場所に集まりセッションを実施していくことになる。ディスカッションや発表の場は、大きな木の木陰だったり、FFS のために特設したテントだったり、村によってさまざまである。毎週のセッションは通常、早朝からお昼頃までの半日で、以下のような時間割に従ってすすめられる。また、「遅刻者は罰金を払う」「携帯電話はマナーモードにする」など、グループ毎の決まり事を設けてメンバーの規律を正している。

プロジェクトからは FFS のノウハウが詰まった「文房具セット」が供与されるが、その中にはグループが規律正しい学校生活をおくれるように、壁掛け時計が入っている。

メンバーは、小グループに分かれ、セッション進行を担当する「ホストチーム」が毎週交代する。FFS 開校当初は、普及員が前面に立って話をすることが多いが、回を追うごとに徐々にメンバーに役割を譲り、最終的には教室の後方で農民による農民のための FFS セッションを見守る役に徹するようになる。

メンバー間には序列をつくらず、すべてのメンバーのコンセンサスによって物事を決めていく。いつも同じ人ばかり発言することがないように、トークボールなどのツールを使い、メンバーが均等に発言できる雰囲気をつくっている。

## 一般的なFFSの時間割の例

TIME	ACTIVITY	RESPONSIBLE
9:00am-		
9:05am-	PRAYERS	11/TEAM
9:05am-	ROL CALL	11/TEAM
9:10am-		
9:20am-	REGARP	11/TEAM
9:20am-	AESA	ALL
9:40am-		
10:40am-	GROUP DYNAMICS	ALL
11:10am-		
11:10am-	DAY'S TOPIC	FACILITATOR
12:10pm-		
12:10pm-	REVIEW/PLANNING	11/TEAM
12:20pm-	ANNOUNCEMENTS	
12:20pm-	ROL CALL	11/TEAM
12:25pm-		
12:25pm-	PRAYERS	11/TEAM
12:30pm-		

KANJIVIRI FFS. TIME TABLE

お祈り・出欠確認  
 先週のおさらい  
 農業生態系分析(アエサ)  
 グループダイナミクス  
 スペシャルトピック  
 今日の復習  
 来週の計画  
 連絡事項  
 出欠確認、お祈り

### (1) AESA

FFS のセッションの中で、最も重要な位置づけを占めるのが AESA である。FFS では、メンバーの中からホストファーマーとなった農民の私有地を借り受け、小規模の学習のための農地(ホストファーム)を設置し、比較試験の対象となる作物や樹木を植え、定期的に測定観察する。ファシリテーターの支援のもと、施肥、土壌、灌水、果樹品種や用材樹種の選択など、条件を変えた比較試験を行う。農民はホストファームを定期的に測定観察することで、日常の農耕作業では意識できない違いを発見し、その土地で最適な技術が開発・検証されるとともに、農民は自ら得た情報に基づき、適用すべき技術を選択できるようになる。

アエサの手順は、(1)観察と測定、(2)その結果の模造紙への取りまとめ、(3)その模造紙を使ってメンバーに発表するという手順をとる。これを毎週繰り返す事で、農民達の観察眼が養われ、畑を観察する習慣が付き、病虫害の発生を早期発見できるようになる。また、女性達が人前で話す機会が増え、堂々と話せるようになるといったエンパワーメントの効果もある。



アエサの観察（害虫などはついていないか?）



データ収集（異なる品種の生育状況を測って比較）



データ分析（アエサ分析表に観察結果を記入する）



発表（毎週、小グループが交代で発表）

## (2) グループダイナミクス Group Dynamics

AESA のあとは、お茶を飲んだり、歌ったり踊ったりという気分転換(グループダイナミクス)の時間が入る。FFS を通じて学んだことなどを、メッセージや歌詞にのせて歌ったり、地域の環境や生活問題を題材とした寸劇にして伝える。

ワークショップのアイスブレイクのようなエレメントもあり、農民が毎週のセッションに出席する「楽しみ」をつくることで、比較的長期にわたって FFS に通い続けるモチベーションを維持できる。また、こうした活動を通じて、グループ内の交流と絆を強め、問題に対する共有意識を醸成することにも役立っている。



### (3) スペシャルトピック(特別課題授業)

その後に行われるのが課題授業のセッションである。通常はその時実施中のエンタープライズに関連した課題（例えば来週のセッションで実施する活動の説明や、それに関連する知識・技術）を講義する。FFSの実施期間が長ければ、それ以外にもグループの関心に応じたトピックを選ぶことができる。普及員が良く知らないトピックに関しては、月1回程度、外部講師(通常は地域の専門分野の普及員)を派遣するなどして実施する。

環境・自然資源管理は多岐の分野にわたって取り組まなければならないことが多く、また農村生活も単一セクターで成り立っているものではない。また育林のように、農民にとってあまり優先順位の高くない活動に関心をもってもらうために、農作物、畜産、保健・衛生や家計管理など、農民の生活改善に直接的にかかわる課題を盛り込むことによって、農民の多様なニーズに応え、FFSへの継続的参加へのインセンティブを高め、総合力を強化することを目的としている。

スペシャルトピックセッションの手配は普及員に任されることが多い。普及員にとっては、通常、関わることの少ない他省の普及員や外部のリソースパーソンを捜し、講義を依頼する必要性に迫られることで、専門分野を超えたネットワークを形成し、自らの視野を広げる絶好の機会ともなる。

## AESA(アエサ)分析表の例

**1. INTRODUCTION**  
 NAME: SONOLOTI FFS  
 SLOGAN: MAZINGARA BANI  
 AESA NO. 27  
 WEEK NO. 46

**2. GENERAL INFORMATION**  
 1. SPECIES: BURKE  
 2. DATE PLANTED: 27.9.2011  
 3. TIME OF OBSERVATION: 5:00 AM  
 4. WEATHER: CLOUDY  
 5. TYPE OF SOIL: LOAM  
 6. SOIL CONDITION: WET

**3. AESA DATA**  
 DATE: 06.03.12  
 SUB-GROUP: KUYUMI  
 SLOGAN: UMATA TO M'GURU

**4. PARAMETERS**  
 HEIGHT CM: 16.05  
 NO. OF LEAVES: 8

**5. OBSERVATIONS**  
 1. DASSIAN SEEMS TO BE HEALTHY  
 2. THE ENVIRONMENT IS GOOD  
 3. PLANT IS GROWING WELL

**6. RECOMMENDATION**  
 1. WHEN GOING TO STOP ONLY FOR TODAY  
 2. NEED TO BE SPINDY NEXT WEEK BUTS-03-2012  
 3. DASSIAN SEEMS TO BE GOOD FOR PLANTING

Name of FFS: _____		Sub-group: _____	
AESA No. _____		Week No. _____	
		Date: _____	
<b>General Information</b>		<b>Tree Data</b>	
Species / Variety: _____		<b>Below 50 cm high</b>	
Spacing (m): _____		Tree height (Average) (cm): _____	
Hole size (cm): _____		Height in last AESA (cm): _____	
Land Preparator (e.g. Ploughing): _____		<b>50 cm to 2m high</b>	
Other treatment (if any e.g. Weeding): _____		Tree height (Average) (cm): _____	
Date of planting: _____		Height in last AESA (cm): _____	
Initial planting size (cm): _____		No. of branches: _____	
Age of Trees (weeks): _____		No. of branches in last AESA: _____	
Weather: _____		For the ladder or firewood purpose	
Time of Observation: _____		Length of branches (cm): _____	
		<b>Over 2m high</b>	
		Tree height (Average) (m): _____	
		Height in last AESA (m): _____	
		CBH (Average) (cm): _____	
		CBH in last AESA (m): _____	
<b>Pests / Insects</b>		<b>Friendly Insects</b>	
<b>Observations</b>		<b>Recommendations</b>	
1. _____		1. _____	
2. _____		2. _____	
3. _____		3. _____	
4. _____		4. _____	

## 「グリーフのルール」の例



学校では規則正しく ~  
 FFSの青空教室に必須の「時計」

1. 遅刻は罰金 50 シリング
2. 授業中に騒音を立てる(20 シリング)
3. 無断遅刻(100 シリング)
4. 携帯電話はマナーモードに!
5. 発言するときは、手を挙げて!
6. 学校では禁煙

## 2-2 FFS 導入ケース [1] ケニア 半乾燥地社会林業強化計画

### ～農業向けに開発された FFS の社会林業への適用例

#### 2-2-1 プロジェクトの背景

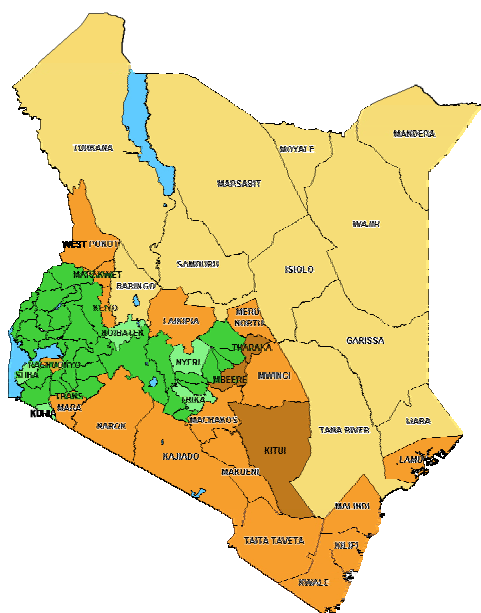
ケニア国はサヘル東端に位置しており、国土の 8 割が半乾燥地または乾燥地で、森林面積は国土の 3% 以下しかない。一方で、国内総エネルギー需要の 7 割以上を薪炭に依存しているなど、森林資源の持続的確保・造成が不可欠となっている。近年では人口増加に伴う薪炭・木材の需要増加に加え、耕地の拡大、過放牧、旱魃などの条件が重なって森林資源の荒廃、土地生産力低下、自然環境の悪化が進んでいる。

日本は貧困層が多い半乾燥地であるキツイ県に対する支援に焦点を絞り、主にケニア林業研究所 (Kenya Forestry Research Institute : KEFRI) を通じて、林業分野における協力を 17 年間に渡って続けていた<sup>42</sup>。当時の社会林業の普及手法は、地域の拠点となる農家を選び、そこに多くの資材を投入して日本人が直接技術を教え、モデルファーマーを育成するというアプローチが主流であった。集中的な指導とインプットによって造った展

示圃場のデモンストレーション効果や、モデルファーマーを通じた周辺農家への技術指導によって、採取が中心だった樹木を育成するといった行動様式変化や育林技術が面的広がりをもって拡大していくシナリオになっていた。

社会林業普及モデル開発プロジェクト (Social Forestry Extension Model Development Project :

SOFEM) の活動の結果、対象地で適用できる基礎的な育苗・植栽技術が開発されるとともに、キツイ県内の 4 郡に 76 軒の中核農家が地域の普及拠点として育成された。しかし、この手法は農家対農家の普及であることから、面的広がりには時間を要し、開発された技術は一向に広がっていく様子がなかった。しかも、選ばれた農家だけが過大な資材投入と技術的指導の恩恵を受けるというやり方は、選ばれなかった農家の間での不公平感と格差を生んだ。一方で、選ばれた少数の農家の間ではプロジェクトの投入に対する依存心が生まれ、自分達が技術普及のエージェントとして、周辺の農家に技術を伝達していくというイン



#### プロジェクト対象地

キツイ、ムベレ、タラカ県の 3 県  
約 241 万 Ha (国土の約 4%)

約 17 万世帯

年間降水量 800～300 mm

センチブは生まれなかった。

<sup>42</sup> ケニア社会林業訓練計画プロジェクト [Social Forestry Training Project : SFTP(1985-1997)]、及び社会林業普及モデル開発プロジェクト [(SOFEM(1997-2002)]

2004年4月に新たに開始されたケニア半乾燥地社会林業強化計画（Intensified Social Forestry Project in Semi-Arid Areas in Kenya : ISFP）は、このような SOFEM の教訓を踏まえ、組織化された農家を普及対象とし、グループで活動を行う方法を取り入れることで面的な広がりや改善、不公平感の解消、グループ活動を通じた農民間の結束の強化を図り、更なる活動の発展を目指すことにした。本プロジェクトは新たに林業普及実施機関である KFS を主たる実施機関とし、キツイ県で開発された半乾燥地における社会林業技術・モデルを普及発展させるとともに、当時、人的にも制度的にも脆弱だった普及行政を強化し、社会林業普及の知見の蓄積と全国的拡大を目的とした。

### 2-2-2 FFS 導入の理由

プロジェクト開始当初、実施機関である KFS の農地林普及部門と半乾燥地部門は、普及システムと呼べるものをほとんど持っていなかった。普及活動の多くは県森林事務所長（District Forest Officer : DFO）や、郡森林普及員（Divisional Forest Extension Officer : DFEO）の個人の人持ノウハウと経験に任されて、散発的に行われていたにすぎない。

一方で、プロジェクトは、5年間という協力期間の中で、広大な対象地域においてファームフォレストリーを普及促進していくことで、地域住民の生計向上・資産の増加と地域の自然環境の改善、森林局普及サービスの改善・効率化を図らなければならなかった。

プロジェクトは先行案件である SOFEM のモデルファーム手法の教訓を取り入れつつも、新たな社会林業の普及戦略を模索することになった。それは参加型学習行動法

（Participatory Learning and Action : PLA）のアプローチにより、農民グループの能力強化を図りながら、社会林業を普及していくという方法である。このときに FAO の専門家から紹介されたのが、グループを対象とした参加型普及アプローチである FFS である。

この頃、ケニアでは既に農業分野を中心とする普及事業で FFS が着実に成果を挙げている。そこで、ISFP 専門家とカウンターパートが、FAO の紹介で当時ケニア沿岸開発庁（Coast Development Authority : CDA）が実施していた FFS の視察に出かけたことで、FFS 手法の導入が本格的に検討されることになった。

判断基準となったのは、FFS の中にプロジェクトが目指す普及形態が既にパッケージとして非常にシステムティックに組み込まれていることだった。まず、農民グループをエントリーポイントとしていること、PLA プロセスを通じた農民の能力強化が図れること、更に農民自身による周辺農民への普及拡大やネットワーク化の可能性などがあった。

また、プロジェクト独自に新しい手法を開発するのではなく、既にケニアでも農業セクターを中心に 1990 年代から導入され、かつ広く他ドナーも推進している FFS を採用することは、先方政府にとっても受入れやすいものと考えられた。当時でも既に 80 カ国近くで活用されていた FFS については、FAO をはじめとした援助機関や NGO にも経験の蓄積があり、既存のさまざまな資料や教材を共有することができる。さらに国際的な FFS

のプラットフォームを使用し JICA プロジェクトの成果を対外的に発信していくことで、KFS やケニア国内にとどまらず、他の国や他機関でも活用されていく可能性も考えられた。

### 2-2-3 FFS を社会林業に導入するにあたっての工夫

前述のとおりケニアでは 1995 年頃に農業分野で FFS が導入されて以来、既に 900 以上のグループが卒業していた。その後、農業セクター以外でも、畜産分野や保健・衛生、HIV/AIDS 孤児のためのジュニアファーマーフィールド&ライフスクール (Junior Farmer Field and Life School : JFFLS) など、さまざまなセクターで FFS が応用されていたが、本格的な林業プロジェクトに FFS を導入するのは ISFP が初期の例であり、KFS にとっては初めての試みだった。

既存のアプローチを採用すると決めたとはいえ、農業セクター普及のために開発された FFS をそのまま適用することはできない。プロジェクトで普及対象となる混農林、ウッドロット (用材、薪炭材等)、フォダー (飼料) バンク、果樹園、苗畑などの技術を取り扱うため、林業向けのモデルに改善していく必要があった。そこで、プロジェクト開始当初から FAO の日本人コンサルタントと JICA 専門家が協力し、社会林業セクター及び JICA の技術協カスキームに合った手法になるようさまざまな試行と工夫を施していった。

#### (1) FFS 実施期間の延長

農業分野で開発された FFS の実施期間は、通常普及対象となる作物の 1 シーズンの耕作期間中続けられる。農業における 1 耕作期間といえは半年程度であるが、林業の 1 収穫期といえは、生長の早い熱帯地域でも 5 年以上は考慮する必要がある。しかし、それはあまり現実的ではないため、プロジェクトでは FFS の実施期間を 1 年目の大雨期前から 2 年目の大雨期後までの 1 年半とした。その地域での奨励樹種の生育速度を考慮すると、植栽後 2 年目の大雨期後にはその生長量、植栽効果、有効性について一定の判断ができる大きさに育っていると考えられたためである。

#### (2) 農業コンポーネントとの組み合わせによる実施頻度の調整

農作物と比較して木の生長は遅いため、週ごとにはあまり大きな差が出てこない。樹木の生長や生育状況の計測・観察だけを考えれば、FFS セッションを毎週やる必要性は低く、月 1 回程度で十分である。しかし、それでは農業 FFS と同じようなグループ活動レベルを維持することは難しい。グループの自覚と強化を促進するためには、ある程度集約的な活動が不可欠である。このような視点から、グループが林業関連の事業を選択した場合でも、必ず単年性作物と混作するデザインが採られるように誘導した。これによってグループが毎週会う必要ができ、メンバーの関心や活動を FFS の実



施期間を通じて維持していくことが可能になった。また、樹木と単年性食用作物との混作により、農地林業（Farm Forestry）本来の目的の1つである農業生産性の向上と、食糧安全保障に貢献することも期待できた。

### (3) 苗畑活動との組み合わせによる農閑期の集約度の継続

一方で、作物の耕作期間は長くて半年であり、プロジェクト対象の半乾燥地の大半では耕作期間は年1回(10月～11月)のところが多い。このため、1年目の収穫が終わった2月から次の作付け準備に入る9月の間はほとんど農業活動が見られない時期となり、グループ活動を維持することが難しくなった。この問題を改善するために、プロジェクトでは図2-3のように苗畑事業をグループ活動にできる限り含めることにし、この農閑期に苗畑を課題としたFFSを継続して実施することにした。

月	Aug	Sep	Oct	Nov	Dec	Jan	Feb	Mar	Apr	May	Jun	Jul	Aug	Sep	Oct	Nov	Dec	Jan	Feb	Mar
エンタープライズ																				
農作物		■	■	■	■	■	■							■	■	■	■	■	■	
樹木			■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
苗畑								■	■	■	■	■	■							

図2-3 ファームフォレストリー・フィールドスクールにおける農作物と林業の時間配分

### (4) 樹木・果樹のための AESA 手法の開発

林業分野への本格的な FFS 適用はこれまで例がなかったため、プロジェクトは独自に植栽木の計測に関する AESA のフォーマットを開発した。実際には農作物の AESA を3週間毎週続けて実施した後、4週目には植栽木の AESA を実施するようにした。こうすることで、農作物の AESA をほぼ毎週、樹木の AESA を4週毎のペースでモニタリングできるように設計した。

## 2-2-4 ケニアにおけるファームフォレストリー・フィールドスクール (Farm Forestry Field School : FFFS) の実施

### (1) ファシリテーター養成研修の実施

プロジェクト開始当初、KFS には FFS の TOF を実施できるマスタートレーナーが存在しなかったため、農業省や CDA のケニア人トレーナーに依頼して2週間の研修を実施した。ただし、プロジェクト終了後、3年が経過した2012年3月現在、KFS 内に9人の FFS マスタートレーナーが育成され活躍している。

TOT はプロジェクト実施の必須条件として、実際に FFS のファシリテーションを行

う DFEO<sup>43</sup>だけでなく、KFS の本部スタッフ、KEFRI のコーマネージャー、DFO に対しても実施した。プロジェクト本部レベルのスタッフにも TOT を受講させたことで、公社幹部の FFS に対する理解が深まり、後に FFS を標準的普及手法として採用させる道筋を開いた。

TOT は毎年実施されたが、2 年目以降はプロジェクト対象地以外の他県の DFEO や 県森林事務所長補佐 (Assistant District Forest Officer : ADFO) も含め、できるだけ多くの ファシリテーターを養成することにした。これは、FFS が比較的長期間継続する普及活動であり、普及員の人事異動や長期研修といった際に、代替りのファシリテーターを確保してグループ活動が継続できるよう、人材プールを増やしておく目的があった。

一方で、この時に養成したファシリテーターは、後にプロジェクトが対象地外の半乾燥地で KFS の通常予算による FFS を試行しようとした際に、実際にファシリテーターとして活躍することになった。

TOT 研修では、参加者を小グループに分けて実施するワークショップ形式で、FFS にかかわる講義、実習、ファシリテーション手法、実際の FFS グループの訪問とその評価等によって構成されている。最後に参加者は、実際の FFS 手法を活用した普及実施計画を作り、現場に戻ってすぐに活動が行われるようにしている。

## (2) バックストップング (補強活動)

FAO が IPM プログラムで FFS を始めた当初のファシリテーター研修は、1 耕作期間を通じ数カ月にわたり実施することが標準的であった。しかし、それでは時間とコストがかかり過ぎるため、2 週間から 3 週間の研修に定型化している。しかし、ファシリテーション・スキルは一朝一夕に身につくものではない。基本的に数カ月の経験ベースで積み上げていくノウハウを、2 週間の研修で理解することは不可能である。特に FFS では、技術普及やエンパワーメントの効果がファシリテーターのスキルに大きく左右されるため、FFS セッションのバックストップング (補強活動) は欠かせない活動になっている。

補強活動はマスタートレーナーなどによって、FFS シーズン中に 1 回から 2 回系統的に実施するものと、プロジェクト本部スタッフや ADFO によって日常のモニタリングベースで実施するものがある。日常のモニタリングでは、FFS ファシリテーターが一方的に情報を伝達するだけになっていないか、農民の自主的な行動や自由な発言を尊重するような働きかけが行われているかといった点を観察し、問題があれば具体的に改善方法を提案するといった指導が行われている。

こうした補強活動に加え、FFS 実施中にも適宜、補完的な技術研修やワークショップを実施したほか、毎年 12 月に 1 年間の総まとめとして、普及員同士の経験共有ワーク

<sup>43</sup> 当初、ケニアの郡森林普及員は各郡 1 人未満しかいなかったが、KFS 本部のプロジェクトマネージャーなどの強い要請により、FFS 実施のために手厚い人材配置が可能になった。

ショップを実施している。これは単なる技術研修ではなく、1年間 FFS を運営してきた経験とその間の気づきにもとづく懸案事項について、プロジェクト本部スタッフとフィールドスタッフが議論、改善案を検討し、合意形成を行う場となっていて、普及員からも高い評判を得ていた。

### (3) 普及実施予算管理システムの変更と適合

ケニアで国連などの他ドナーが支援している FFS では、活動予算を普及サービスコストも含めて対象グループの銀行口座に直接振り込む方式をとっているものが多い。

このためドナーは日常のロジをほとんど行う必要がなく、FFS の活動予算はすべてグループによって管理・執行されている。自分たちで管理可能なファンドを得ることによって、グループ自ら予算管理を学習する機会にもなり、FFS 実施中や卒業後に収入向上活動を展開していくための能力強化という点でも有益である。

また、普及員の日当と燃料代もグループの口座にデポジットし、農民から普及員に支払うシステムを採用しているケースもある。このやり方は、普及サービスに対する農民のコスト意識を醸成し、無料のサービスではないのだから FFS のセッションを有効活用しなければいけないといった意識の向上につながる。また、このシステムでは普及員は実際に村に行かなければ日当がもらえない上、パフォーマンスが悪ければ農民が支払いを拒否することが可能なため、普及員のモラルとスキル向上に加え、農民が主導権を握るという点でエンパワーメントにもつながる。

しかし、政府機関の現行の予算システムではこのような融通は利かない。プロジェクトでは直接の資金提供はせず、すべての活動予算執行を普及員の上司にあたる森林管理所長を通じて直接管理した。FFS では各グループの活動日がはっきり決まっているため、毎月の訪問プランをある程度自動的に作成でき、最初にグループまでの距離を測っておけば普及員の燃料費の概算もできる。プロジェクトでは、普及員のグループ巡回予定表と訪問実施予算の計画・報告シートを作成し、ロジ管理の簡略を図ることで、政府機関の普及実施にも対応可能なシステムになるよう工夫をした。

一方で、この予算執行の裁量権を農民グループに与えなかったことで、農民の能力強化という効果が見込めなくなったことは大きかった。この失われた利点を補うため、プロジェクトでは農民グループにファシリテーターと一緒に FFS 事業ごとのプロポーザルを作成させ、グループが作った計画に応じて資材を調達・支給する形式をとった。

また、予算管理のシミュレーションとして、通常のホテルファームへの投入を一律 1 万ケニアシリング（約 1 万円）とし、その範囲内での活動計画をつくらせ、使う度に残高が分かる欄をグループの週間報告書に設けて確認できるようにした。普及コストに関しても、毎週普及員が訪れるたびにその日当と燃料代を計算する欄を報告書に設け、金額が累積していく様子を確認できるように工夫した。

#### (4) FFS グループの選定

FFS グループの選定にあたっては、1年半の FFS に継続的に参加する意思を持った農民グループで、かつプロジェクトが設定した基準を満たした既存のグループ<sup>44</sup>、もしくはプロジェクトが特定したプロセスに従って新たに形成された農民グループを対象にした。

既存の農民グループを選抜する場合には、プロジェクトがあらかじめ取り決めた基準とスコアを用いた調査票を作成し、それに基づき 1 ロケーション<sup>45</sup>あたり 2 から 3 のグループを調査し、総合点の高いものから順に選抜した。選抜の基準としては、「活発な構成員が多い」「世帯数が多い」「識字率が高い」「植林に関心がある」「ホストファームの候補者がいる」「議事録・会計簿等を持っている」などである。

一方、新たにグループを組織する場合には、まず、ロケーション長を通じて村落集会を開催し、プロジェクト及び FFS の趣旨を説明した上で、関心のある農民に集まってもらってメンバーを決定した。その後、グループの執行委員とグループ運営上の取り決めで合意すると、文化・社会事務所にグループとして登録させた。

1つのグループの人数は、既存グループの場合で 15 人から 25 人程度の規模である。40 人くらいでスタートしたグループもあるが、卒業まで残るのは 30 人程度であった。新たに FFS グループを作る場合でも、初めは 35 人程度で始めて、最終的に 20 人くらいに落ち着く。途中でドロップアウトするメンバーがいることを考慮して、少し多めの人数で始める必要があった。

途中で来なくなるメンバーがいるのは、個々の農民において FFS に期待するものが違っていたことが要因の 1 つになっていた。農民の中には、初めから援助機関からの資材の供与など、何か短期的な個人の利益が得られるのではないかと期待して参加するものがいたが、そういう人は長く続かない。FFS は農民側のリスクを最小限に抑えて新たな営農方法などを学ぶ場であるが、参加する側にも、1年から1年半の間、毎週のセッションに参加し続けるというコミットメントが要求される。それを乗り越えて最後まで通い続けられた参加者だけが、「農民エキスパート」として卒業証書を授与される。

#### (5) FFFS の実績

これまでに述べたような準備と試行錯誤を通じて、プロジェクトでは 2004 年から 2009 年までの 5 年間で、普及員による FFS を 4 ラウンド 105 グループ、農民ファシリ

<sup>44</sup> ケニアの半乾燥地の人々は散村形態で生活しており、村落の伝統的自治組織はほとんどないか、かなり緩やかなものである。このような状況で、農民は近隣同士でグループを形成して自助活動を行っている。グループメンバーの年齢、性別等の構成はさまざまで、目的や活動内容も農業、苗畑、保健、社交などさまざまであるが、多くがメリーゴーランド（無尽講・頼母子講）と呼ばれる貯蓄活動を基盤としている。1村落に10程度のグループが存在し、活動の活発、不活発の差はあるものの、一般的には政府・ドナー等の援助を受ける目的で文化・社会事務所に登録されているものが多い。

<sup>45</sup> 村落の上位レベルの行政単位。

テーターによる FFS を 3 ラウンド 219 グループに対して実施した。推定 6,400 人余りの農民エキスパートが卒業し（表 2-2）、養成した農民ファシリテーターは 234 人<sup>46</sup>以上にのぼる。さらに、2008 年 3 月までに約 2 万人の周辺農家が FFS フィールド・デイに参加し、プロジェクト期間を通じて 2 万人以上が FFS 卒業式に参列したと推計されている<sup>47</sup>。フィールド・デイや卒業式では、FFS での学習成果の発表や学習圏場の視察も行われるため、周辺農家へのデモンストレーション効果や、他ドナーへの広報効果もあるとされている。したがって 4 万人以上に対して何らかの波及効果が見込める数字となっている。

表 2-2 ファームフォレストリー・フィールドスクール（FFFS）の実績

ラウンド(期間)	普及員実施による FFS	農民ファシリテーターによる FFS	FFS グループ 合計	FFS 卒業生
第 1 ラウンド(2004-2006)	48	-	48	773
第 2 ラウンド(2005-2007)	22	-	22	450
FF ラン第 1 ラウンド(2006-2007)	-	52	52	1,275
第 3 ラウンド(2006-2008)	18	-	18	409
FF ラン第 2 ラウンド(2007-2008)	-	73	73	1,336
第 4 ラウンド(2007-2009)	17	-	17	N/A
FF ラン第 3 ラウンド(2008-2009)	-	94	94	N/A
<b>合計</b>	<b>105</b>	<b>219</b>	<b>324</b>	<b>6,463*</b>

\* 最終ラウンドの卒業生数データがないため、1 グループ 20 人として推計した。

<sup>46</sup> 2008年8月終了時評価報告書時点

<sup>47</sup> FFS卒業セレモニーの参列者には、郡行政官、関係省庁やNGOの普及員、周辺農家が含まれる。

表 2-3 ファームフォレストリー・フィールドスクールの直接費用(普及員ラン)

文房具一式		5,000		
教材費一式		10,000		
普及員の日当	(75 週)	15,000		
普及員訪問燃料費		18,750		
普及員バイク維持管理		6,500		
外部講師謝金(隔月程度)	(18 回)	8,100		
バックストップスタッフの日当	(9 回)	3,600		
B/S 燃料費		4,500		
B/S バイク維持管理		1,600		
フィールド・デイ	2,500Kshx2 回	5,000		
エクステンジ・ヴィジット	1 回	3,500		
卒業式一式		3,500		
<b>合計</b>		<b>85,050</b>	<b>Ksh</b>	<b>(≒85,000 円)</b>
参加者 1 人当たりの費用(1 スクール 30 人参加の場合)		2,835	Ksh	(≒2,800 円)
				1 Ksh ≒ 1 円
				Ksh=ケニアシリング

#### (6) FFS のコスト

表 2-3 は平均的な普及員ランの FFS の 1 シーズン(1 年半)ごとの直接費を示したものである。1 校あたり約 85,000 円、参加者 30 人として農民 1 人当たりのコストは 2,800 円程度である。プロジェクト中間評価調査当時、FFS は費用がかかりすぎるため、KFS の標準的普及手法として制度化するためには、セッション頻度や普及員の訪問回数を減らしコストを削減するなどの改善が必要であるなどの指摘があった。しかし、後述するとおり、その後 JICA 専門家の働きかけと KFS のプロジェクトマネージャーの支援により、プロジェクトの対象県外で公社の通常予算枠による FFS を試行的に実施することができている。

2012 年 3 月の現地調査時の聞き取りでは、KFS 普及局上層部から、FFS はむしろグループ・アプローチを採っているため、個別農家相手普及活動より効率が良く、事業のモニタリングの容易さや総合的な技術普及、技術の実践率の高さを勘案すると、むしろ費用対効果の高い手法であると認識しているとのコメントであった。

□コラム2-1 農民ファシリテーターのナンシー・カニーニさんの話



ムベレ県ギクヤリ村のナンシー・カニーニさん(49歳)は、27歳の長男を筆頭に5人の子どもを育て上げているシングルマザー

1997年からムテザニア(「助け合い」の意)という名前の女性の自助グループをつくって苗木生産などの活動を初めたが、十分な知識も資材もなく、生産は思うように伸びなかった。

そんな中、2004年にKFSの普及員が訪ねてきて、JICAの社会林業プロジェクトでFFSという農民学校を始めるので参加しないかと誘われた。そこでグループの仲間と参加することに決め、ホストファームも提供した。始めた当初は、時間を守らなかったり、期待していたことと違うとあって、途中で来なくなってしまいう仲間もいて、20人で始めたFFSグループのうち、半分以上が途中でやめてしまった。それでも残ったメンバーで、フォダーバンクと *Melia volkensii* の混農林の比較試験を続けた。そのほかにも、マンゴーの接ぎ木や、地拵のしかた、改良樹種や植栽間隔などを習い、ヤギの飼育もはじめた。特に新しい技術と比較にあたって、コストと利益を比べるという新しい習慣が身についた。

スペシャルピックの講義では、育林の他に、村で手に入る材料を使った栄養料理の作り方や石鹸作り、家政学、プロポーザル作成方法なども習った。

仲間の方たちの中には、妻たちのFFS参加に反対する人もいた。毎週、午前中何時間も集まるなんて時間の無駄だとか、皆で手を叩いたりするのは子ども染みていると言われた。それでも、接ぎ木技術を覚え、大きく立派なマンゴーを作り、町の市場で高く売れるようになるのと、FFSに反対しなくなった。スペシャルピックで習ったレシピで、雑穀やソルガムのピラフやさつまいものチャパティ、甘いトマトジャムなどを作ると、子どもたちも喜んでくれた。

FFSを始めて1年たったころ、普及員のフォンドさんから、農民ファシリテーターに推薦された。JICAのプロジェクトで1週間の技術研修を受けた後、残り半年のFFSセッションで普及員のフォンドさんに代わってグループのファシリテーションを務めようになった。ファシリテーションのスキルを身につけるには、この半年間がとても役に立った。1年のFFSでは覚えられなかったと思っている。

FFSを卒業した後、翌年からファーマーランのFFSグループを受け持つようになった。最初のグループは、既存グループの中からプロジェクトの資格要件にあったグループを選んだ。1年目から3年目までは、3つの女性グループのFFSを担当し、4年目には、青年グループのファシリテーションを行った。若者たちは活動的で、女性グループのFFSと比べ

でも運営の難しさを感じることはなかった。

農民ファシリテーターをやっていて、一番大変だったのは遠くの村に歩いて通わなければいけないことだった。雨期の間は特に辛かった。農繁期になると、作物の植え付けに忙しくて欠席する人が増えた。それでも、農作業が一段落するとみんな戻って来てくれた。

途中でドロップアウトしてしまう人も多かった。25人で始めても17人くらいしか残らないこともある。高齢のメンバーは、セッションの途中で疲れて居眠りしてしまうこともあった。苗畑造りは水が問題で、乾期に塩分を含んだ水をやると、苗が乾燥してしまった。

昨年まで農民ファシリテーターとして4つのFFSグループを卒業させたが、2011年からイタリアのカトリック団体に認められて、その団体が支援する総合村落開発プログラム（Integrated Rural Development Programme : IRDP）が実施するFFSのファシリテーターとして雇ってもらえるようになった。FFSで学んだ技術で収入向上できたことや、ファシリテーターとして日当をもらえたことで、5人の子どもを学校に通わせることができた。FFSが無かったら、もっと困窮していたと思う。

FFSに参加して変わったことは、生活が良くなったことの他に、KFSの普及員と信頼関係ができたこともある。以前は、森林普及員が村に訪ねてくることはほとんどなかった。普及員が来ても、私たちが農地に植えた木を切るのを罰するために来たのだと思い、気軽に話をすることもなかった。

FFSを始めてからは、普及員に対する考え方が変わった。今では何でも相談できる。普及員は、私たちを助けるために来てくれることが分かり、木を育てる技術や、木を守ることの大切さも分かってきた。FFSのスペシャルトピックのために、森林局の普及員だけでなく、農業局や畜産局の普及員も、以前よりよく村に来てくれるようになった。

私たちだけでなく、普及員の人達も変わったと思う。私たちが使うムベレ語をよく喋るようになったし、私たちも普及員が話すスワヒリ語をよく話すようになった。

#### （7）農民ファシリテーターの育成と活用

普及員によるFFSが開始され、約1年が経過した段階で、普及員の提示する基準をもとにFFSグループメンバーが互いのパフォーマンスを評価することで農民ファシリテーター候補を選抜する。選ばれたメンバーは、まず農林業技術を中心とした1週間の研修を受けた後、1年半のFFSの残りの半年間を、自分のグループ内で主体的にファシリテーションを行い、スキルアップを図っていく。このアタッチメント期間中、普及員は徐々に農民ファシリテーター候補に役割を譲り、自分はサポート役に回るようになる。こうすることで、普及員はグループの訪問頻度を減らしていき、やがて月1回程度のバックストップングを実施するだけになる。これにより農民ファシリテーターを自立させるとともに、普及員は次のFFSグループのファシリテーションを始めることができる。

6カ月間という比較的長期にわたって、実戦的にファシリテーション・スキルを身に



つけた農民ファシリテーター候補は、FFS 卒業前にプロジェクトから最終的なパフォーマンス評価を受ける。合格した候補者はプロジェクトの普及システムに関するオリエンテーションを受けた後、次のシーズンから普及員と同様のプロセスでファーマーラン FFS のファシリテーションを実施していくことになる。

なお、農民ファシリテーターのモニタリングは、普及員による定期的なバックストップ訪問と、郡レベルで開催する普及員との月例ミーティングを通じて実施されていた。農民ファシリテーターは普及員とは書式の異なる実施計画・報告書を利用し、ファシリテーション手当てとミーティング参加の日当・交通費が月例ミーティングで支払われた。

FFS の導入当初、KFS の一部では、「FFS はコストがかかりすぎるため、プロジェクトの支援なしに通常の普及予算枠で継続することは困難である」、あるいは「森林事務所の通常の予算で FFS を実施するためには、訪問頻度や期間を短縮した廉価版のパッケージを作らなければならない」といった指摘があった。果たして FFS 採用のボトルネックになっているのはコストなのか、これを検証するために、プロジェクトでは 2006 年に実施した 3 回目のファシリテーター研修で、KFS 本部の承諾のもとに、県森林事務所レベルで研修後の FFS 実施をコミットするように実施計画を作成させた。

この背景には、プロジェクト対象県の 1 つであるキツイ県の ADFO が他県に栄転となり、新しい任地でも FFS を実施できるよう本局のプロジェクトマネージャーに支援を依頼したことも発端となった。プロジェクトマネージャーは、FFS 導入当初からそのポテンシャルに強い関心を示し、公社の上級職員に対して FFS セミナーを実施するなど、FFS の普及手法としての優位性を積極的に広報していた。そこで、FFS を主流化する試みとして、公社の通常予算ベースの普及活動に FFS 手法を用いることにしたのである。前述したように 2 回目以降の FFS ファシリテーター研修には、対象地外の半乾燥地 7 県の DFO や DFEO を含めていたため、ファシリテーターの人材プールは既に存在していた。プロジェクトからは、KFS 予算以外に FFS のノウハウが詰まった文具 1 式(5,000Ksh=約 5,000 円)を供与したのみで、その他に公社本部スタッフとプロジェクト専門家によるバックストップ支援を行った。

この結果、普及員の能力によってばらつきはあるものの、プロジェクトエリア以外で森林事務所が通常事業予算だけで実施した場合でも、満足できるレベルの FFS 活動が可能なが、いくつかの県で確認された。むしろ、プロジェクトによる潤沢な予算がない場合でも、FFS のようにストラクチャーのある普及手法の方が旧来の散発的訪問形式の普及手法より効率的であったともいえる。またこの結果は、FFS 導入に関して重要なのはコストの問題よりも、KFS の組織としての意思決定と現場へのサポート体制があるか否かであることも示唆している。

プロジェクト終了後、KFS では FFS 手法による普及パッケージを組織の標準的な普及手法の 1 つと位置づけ、可能な限りこれを使うように組織的に働きかけている。具

体的には、全国を71地区に分けたKFSの管轄区域のゾーン（県）・マネージャー<sup>48</sup>を通じ、各ゾーンで年間2校を目標に、公社通常予算による普及員ランのFFSを実施することを奨励している<sup>49</sup>。

また、ドナー支援のプロジェクトでは、プロジェクトコンセプトが上がってきた段階から、案件形成、ドナー交渉、事前評価などのプロセスを通じてFFSを導入するように積極的に働きかけている。その1つにアフリカ開発銀行(African Development Bank : AfDB) 支援によるグリーン・ゾーン開発支援プロジェクト (Green Zones Development Support Project : GZDSP)が挙げられる。

#### □コラム2-2 KFS 普及局長が認識するFFSのメリット

ISFPのカウンターパートであったプロジェクトマネージャーとアシスタント・マネージャーは、それぞれ、現在KFS普及担当副総裁、世界銀行日本社会開発基金 (Japan Social Development Fund : JSDF) プロジェクトマネージャーに就任している。公社内でFFS手法を推進する立場にある彼らが認識するFFSのメリットについて質問してみた。

まず、予想に反してFFSは費用対効果が高いという利点が一番に挙げられた。グループ・アプローチをとることが個人農家対象の普及活動より効率的なこと、普及活動の一連の流れがシステムティックに実施できること、活動のモニタリングが容易であるといった理由によるものだった。さらに、技術の実践・定着率が高く、総合的な技術普及ができるため、多少コストと手間がかかっても、結果的に効果的であるという考えであった。

普及効果だけでなく、FFSを導入することによる農民や普及員の変化についてもコメントが述べられた。FFSの最大の特徴は、その実施プロセスを通じて、農民の潜在的なキャパシティを引き出すことにある。農民の自主学習を支援することで、農民が育ち、主導権を握るようになる。1年間のFFSで自信をつけ、自らのポテンシャルに気づいた農民は、外部援助への依存心が減ってきたという。

さらに、変わったのは農民だけでなく、われわれも同じであると続ける。以前は、農民よりも自分たちの方が、当然知識があると思っていた。しかし、ろくに学校も卒業していない農民が、実はわれわれも知らないことを知っているのに驚いた。これによって、村落開発に対する考え方そのものが変わってきたという。

こうしたKFS上級スタッフの発言は、こちらから誘導したものではなく、「FFSについてどう思うか？」といった一般的な質問に対し、それぞれが競いあってコメントを述べるという様子であった。何か彼らをここまで熱心にさせるのか、それは実際にケニアのFFSグループを訪ねるうちに分かってきたのである。

<sup>48</sup> 2010の憲法改正でケニアの行政区分が改編され県が廃止されたことにより、KFSの管轄区域は暫定的に県をゾーンと改称している。県森林事務所は森林ゾーン事務所に、県森林事務所長(DFO)はゾーン・マネージャーに改称した。

<sup>49</sup> プロジェクトでは、普及員ランのFFSは1年半だったが、KFS予算によるFFSでは1年に短縮している。

#### (8) FFS 卒業グループのネットワーク化支援～自立発展への取り組み

プロジェクトでは、農民グループが FFS で学んだ社会林業技術や IGA を更に自立的に展開・拡大していくために、卒業後グループのネットワーク化を奨励した。個別の FFS 卒業グループが地域でネットワークを組織し、情報共有などを行っていくことは、以下のような利点があり、既に FAO を初め他ドナーが支援する FFS では、グループのネットワーク化による収入向上活動が成果を挙げている。

- 個人では受けることが難しい高度な技術支援の獲得、情報・経験の共有
- 共同購入による資材調達コストダウンと品質の改善
- 市場開拓とマーケティング情報の共有
- 共同出荷によるコスト削減・価格のコントロール
- 政府機関や NGO、ドナーからの支援獲得機会の向上
- ネットワーク基金設立などによる個人・グループ融資、一般金融機関からの資金調達

プロジェクトでは、グループの主体性の尊重とネットワークのオーナーシップ醸成に配慮しつつも、FFS 終了後あまり時間を空けないうちに、卒業後グループの代表者を招いた経験共有ワークショップを企画し、その中で FFS ネットワークについてエクスポージャーを試みた。その結果、プロジェクト期間中に 5 つのネットワーク<sup>50</sup>が組織された。しかし、ここで問題となったのはこれらのネットワークを通じた IGA をサポートする枠組みがプロジェクトにはなかったことである。

図 2-4A のように降雨量が見込めるハイポテンシャル地域で園芸作物をエンタープライズした FFS の場合、ホストファームそのものをすぐに商業農地として置き換えて考えることができる。卒業後は同様の商業農地を拡大していったり、その商業農地の生産物を市場化していくことが次の課題となり、ネットワークの活性化につながっていく。

これに対して、プロジェクトのように半乾燥地でのファームフォレストリーをテーマとした FFS (図 2-4B)では、果樹・林産物といった収穫までに時間がかかるエンタープライズを扱っており、卒業時に商品化できる生産物が苗木を除けばほとんどない状況に陥る。そのため、ハイポテンシャル地域と比較すると、ネットワーク形成の動機が低い上、ネットワークを組んでもすぐにビジネス活動が活性化しないために、組織化だけで終わってしまう可能性がある。

このように林業関連の FFS で課題となるのが、市場化できる生産物が上がってくるまでの数年間、FFS 卒業グループやネットワークに対してどのような投入を行い、活動を維持・展開していくかである。多くの場合、卒業グループは、FFS により能力が強

<sup>50</sup> ムベレ県1、タラカ県1、キツイ県3の計5つ。

化され意欲が高揚したにもかかわらず、資金不足のためその後の活動の継続・拡大に苦慮している。理想的には果物や林産物の収穫が始まるまでの1~2年程度は、マイクロファイナンス等の支援を考慮に入れた何らかの支援システムがあることが望ましい。このようなシステムがあれば、活性化したグループによる農地林業活動が頓挫してしまう危険性が軽減され、ネットワークによる市場化のような高いレベルの活動へと発展していく可能性が高まり、結果的に現地での社会林業活動の持続発展性が担保されると考えられる。

A. ハイポテンシャル地域で園芸作物を学習テーマとしたFFSの場合



B. 半乾燥地でファームフォレストリーをテーマとした場合

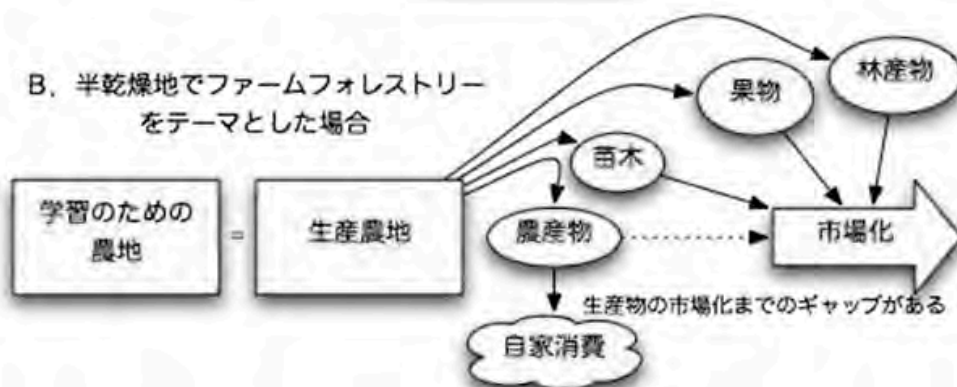


図2-4 FFSホストファームの商業農地化の概念図

(9) JSDFによるフォローアップフェーズ

KFSは、ISFPのFFS卒業グループのネットワーク活動の活性化、小規模融資のメカニズム開発、農地林業産物を活かした農民ビジネスへの基礎固めを行なうために、世界銀行に信託されたJSDF<sup>51</sup>によるISFPフォローアッププロジェクトの申請を検討することにした。これが採択されると、プロジェクト5年間の成果の発展や、上述したFFS卒業時から林産物の収益が上がり始めるまでのブランク期間を埋めるという課題の解

<sup>51</sup> 日本政府の拠出(100億円)により、2000年に世界銀行に設置された信託基金の1つで、途上国におけるコミュニティ主導の開発や貧困削減に資するプログラムへの支援を通じて社会サービスへのアクセスを改善し、貧困層及び脆弱層の生活を改善することを目的とする。

決に向け、具体的な FFS 支援と活動実施を期待できる。こうして JSDF による「ケニア半乾燥地ファームフォレストリー支援プロジェクト(Support to Community Based Farm Forestry Enterprises in Semi-Arid Areas in Kenya : SCBFFE)」のプロポーザルは、ISFP の普及戦略策定時から技術指導を行ってきた FAO 専門家の支援によって作成された。そして、約 200 万ドルの協力資金（2010 年 2 月から 2014 年 2 月まで 4 年間の協力期間）供与が 2009 年 9 月に承認され、2010 年 2 月に活動開始した。プロジェクトマネージャーに ISFP のアシスタント・マネージャーが就任した。

表 2-4 FCBFFE の FFS グループ支援実績

	ムベレ・ゾーン	タラカ・ゾーン	キツイ・ゾーン	合計
1. 農民ファシリテーターによる FFS の実施 (JSDF 支援)	13 グループ	10 グループ	27 グループ	50 グループ
2. 普及員による FFS の実施 (KFS 通常予算による)	2 グループ	0 グループ	1 グループ	3 グループ
3. ゾーンレベルの FFS 卒業グループ上位ネットワーク	CBO として登録済み			
3. 郡レベルの FFS 卒業グループのネットワーク数	4 ネットワーク	3 ネットワーク	5 ネットワーク	12 ネットワーク
4. 郡レベルのネットワークに参加する FFS 卒業グループ数	86 グループ	?	?	?
5. FFS グループにより提出された小規模ビジネスプロポーザル数	36 件	22 件	66 件	124 件
6. 小規模ビジネスプロポーザルを提出している FFS グループ数	16 グループ	12 グループ	40 グループ	68 グループ

世界銀行の SCBFFE プロジェクトは、ISFP と同じ半乾燥地 3 県を対象とし、ファームフォレストリー関連の小規模農村ビジネスの支援と FFS グループのネットワーク強化支援を通じて対象地の持続的な生計向上を図ることを目的としている。

活動の主なコンポーネントは 2 つあり、(A) ISFP で組織化された FFS グループのネットワーク強化支援、及び(B) FFS グループによる農村ビジネス支援に分けられる。

まず、最初のコンポーネント(A)では、ISFP で組織化された約 330 の FFS 卒業グループのネットワーク強化を支援することになっている。卒業した FFS グループは、まず任意で各郡レベルでネットワークを形成し、更にゾーンレベルで上位ネットワークを組織し、住民組織 (Community Based Organization : CBO) として郡の文化社会事務所に登録している(現在はムベレ・ゾーンのみ)。各ネットワークの役員<sup>52</sup>やメンバーに対し、グループ管理、予算管理、リーダーシップ、生計向上ビジネス、農村ビジネス企画、会計記録などの新たな研修を実施し、また、生産物の共同出荷販売、品質向上と経験共有を促進することで FFS の好事例のスケールアップを図っている。現在、ムベレ・ゾーンでは ISFP の FFS を卒業した 86 グループが 4 つの郡レベルでネットワーク(3 ゾーン合計 12 ネットワーク)を形成して

<sup>52</sup> 議長、副議長、会計、庶務など、メンバー互選による 7 人の役員がいる。

いる。当初、ネットワーク加入に消極的だったグループも、農村ビジネス融資やキャパシティ強化支援にメリットを感じ、今後、加入グループが増えていく状況が予想されている。

ISFP で支援した既存の FFS グループに加え、JSDF 資金により新たな FFS を農民ファシリテーターによって実施している<sup>53</sup>。これに並行して、KFS でも外部資金に頼らない独自予算により普及員による FFS を実施している<sup>54</sup>。

次にコミュニティビジネス支援のコンポーネント(B)では、卒業後ネットワークに加入した FFS グループ<sup>55</sup>、もしくは卒業前 FFS グループが企画提案するファームフォレストリービジネスに対して、民間金融機関を通じた小規模融資を提供することになっている。

このコンポーネントの実施に際して、SCBFFE プロジェクトでは一般銀行であるエクイティ・バンクと連携して融資を実行するとともに、当該銀行職員を通じて FFS グループに対するローン管理、ビジネス・会計管理などの事前研修を行っている。融資はグループもしくはメンバー個人に対して提供され、個人の場合 5 万シリング(約 5 万円)、グループ融資の場合は人数にもよるが 50 万から 70 万シリング(50 万～70 万円)が上限となっている。融資事業に対して、借入人は労働力や地元で入手できる資材といった形で 20%を提供することも条件となっている。

本件調査を実施した 2012 年 3 月現在、対象地の 1 つであるムベレ・ゾーンにおいて、16 の FFS グループから合計 36 件のビジネスプロポーザル(3 ゾーン全体では 124 件のプロポーザル)が提出されており、現在、審査、融資実行を待っている状態である。

以上のように、ISFP のスキームでは実施することが困難だった FFS 卒業から数年の無収益期間を、SCBFFE プロジェクトでは、小規模融資スキームによりファームフォレストリーのビジネス化支援を行うことで、卒業後グループの活動レベルが維持継続され、ネットワークによる市場化といった次の段階の活動へ進むことが可能になっている。

## 2-2-5 FFS 導入の成果

プロジェクトでは「半乾燥地域において社会林業活動を強化する」という目標達成の指標として、FFS 参加前後の苗木生産本数と植栽本数などを用いることにした。FFS では卒業前の 6 週間をファイナル・セッションと称した総まとめの時間に充て、メンバーが農作物の収量や苗木生産本数など、自分達の農地でどのような変化が起きたかを確認しあうワークショップの時間を設けて参加型でデータを入手した<sup>56</sup>。また周辺農家に対しては、各グループの近隣から 6 人を選定してもらい、インタビューを実施した。図 2-5 及び図 2-6 は 2007 年 4 月に FFS を卒業したキツイ県内対象 10 郡の 40 グループのファイナル・セッションでの自己評価記録、及び各グループ周辺農家 6 人に対する聞き取り調査結果を示したものである。

<sup>53</sup> 4年間の数値目標は80FFSの実施。

<sup>54</sup> KFSの努力目標として、すべての森林ゾーン事務所圏内で、年間2FFS実施を奨励している。

<sup>55</sup> FFS卒業後グループは、ネットワーク加入が小口融資を申請できる条件としている。

<sup>56</sup> 個別インタビューよりも、この方法の方がメンバーの前で収量や苗木生産本数などを発表しなければならないので、正確な情報が得られやすいと判断された。

他県においても同様の傾向を示しているが、苗木生産本数が 23 千本から 82 千本、植栽本数が 19 千本から 43 千本と、それぞれ 260%、123% という大幅な増加率を示している。

また、周辺農家についても、FFS 参加者ほどではないにしても、苗木生産本数が 17 千本から 53 千本、植栽本数が 34 千本から 45 千本と、207%、33% の増加率が認められる。

FFS に参加していない周辺農家へのプロジェクトからのインプットは、通常年に 2 回から 3 回実施されるフィールド・デイのみであるので、この増加率は特筆に価する。周辺農家への波及の理由として、FFS メンバーが学んだ技術や知識を自発的に隣人伝えたり、隣人が PTD の様子を見たりして学んだことなどが要因として考えられる。FFS の場合、農民は新しい技術を実践した上で自ら選択・獲得するので、知識として教えられただけの場合と比較しても、人に教えたいという意思が強くなるし、経験に裏付けられ言葉は、外部の人がやらせたものにはない説得力があると考えられる。実際に、2008 年 8 月に実施された終了時評価調査時の聞き取りによれば、FFS 卒業生が苗木生産・植林活動を継続しており、更に周辺農家にも苗木を販売したり、植林の助言を行ったりしていることが確認された。

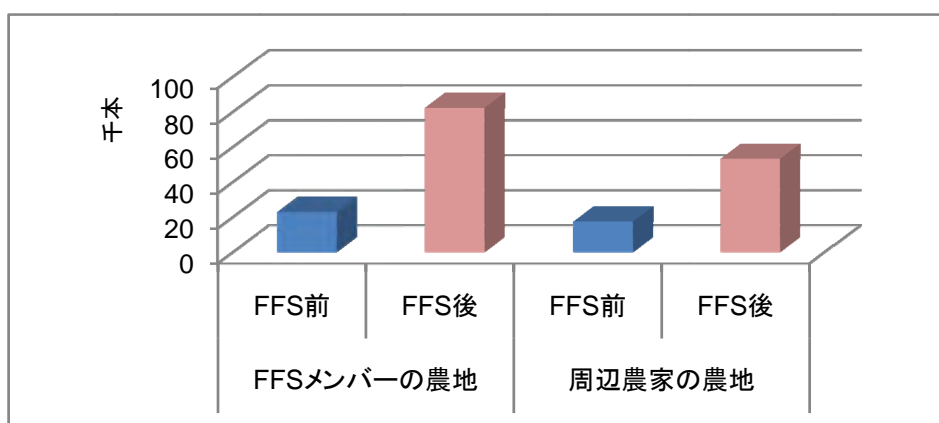


図 2-5 キツイ県における FFS 対象農家と周辺農家の苗木生産本数の推移 (FFS 前と後)

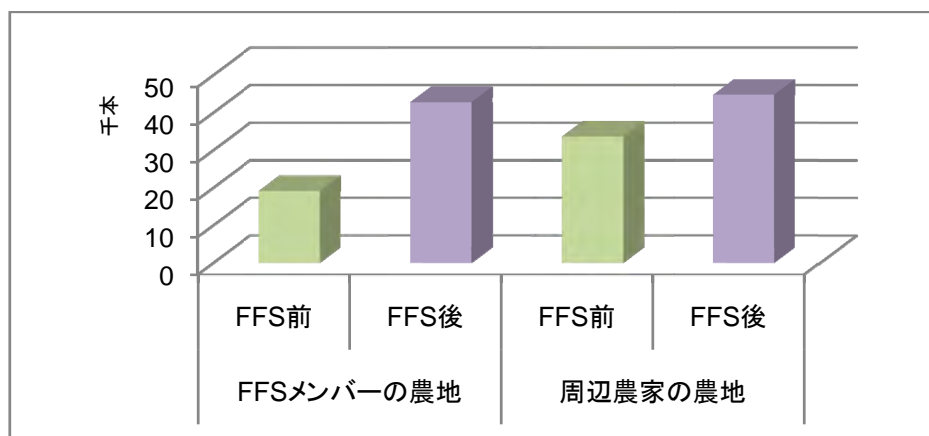


図2-6 キツイ県における FFS 対象農家と周辺農家の植栽本数の推移 (FFS 前と後)

□コラム2-3 FFS 卒業グループのネットワーク活動～ガチャゲゼウリ農民グループ



ムベレ県のガチャゲゼウリ農民グループは、国連世界食糧計画 (World Food Programme : WFP) のフード・フォー・ワークプログラムの支援を受けるため 2003 年に結成された。女性 17 人、男性 10 人の 27 人のメンバーで構成され、郡の文化社会事務所にもグループ登録している。当初の主な活動は、苗木生産やグループ貯蓄の管理などだったが、2005 年に JICA の ISFP プロジェクトが支援する FFS に参加するようになった。

なった。

FFS では苗木生産、植林、マンゴーの接ぎ木技術、土壌保全などの技術を学んだ。そのお陰で、農作物や苗木の生産量が増えて収入があがった。マンゴーは在来種を作っても、大きさにかかわらず 1 個 5 シリングしか売れなかったのに、改良種は 10 シリングから 20 シリングで売れる。

以前は農民が木を植えて育てたことはなく、自然更新に任せていたが、FFS の後、皆が木を植えるようになってたくさんの樹木が育っている。土壌保全は男性の仕事だと思っていたが、女性にも簡単にできることが分かった。何よりも環境を守ることの重要性が理解できた。

FFS のフィールド・デイでは、近隣の住民と交流が増え、苗木の生産方法や植林を習いに来るので、FFS で学んだことを教え合った。卒業してもグループの結束は強く、苗木生産などの活動を続けている。

2011 年に JICA の ISFP のフォローアップで KFS の人が訪ねてきて、FFS ネットワークに



参加するように勧められた。ネットワークに入れば、新たに研修を受けられ、銀行から小規模のローンを借り、グループ・ビジネスを拡大できるという。その後、世界銀行の SCBFFE プロジェクトの支援でプロポーザル（企画書）の作成方法を学び、2つのグループ・ビジネス企画書をつくって融資を受ける準備をしている。

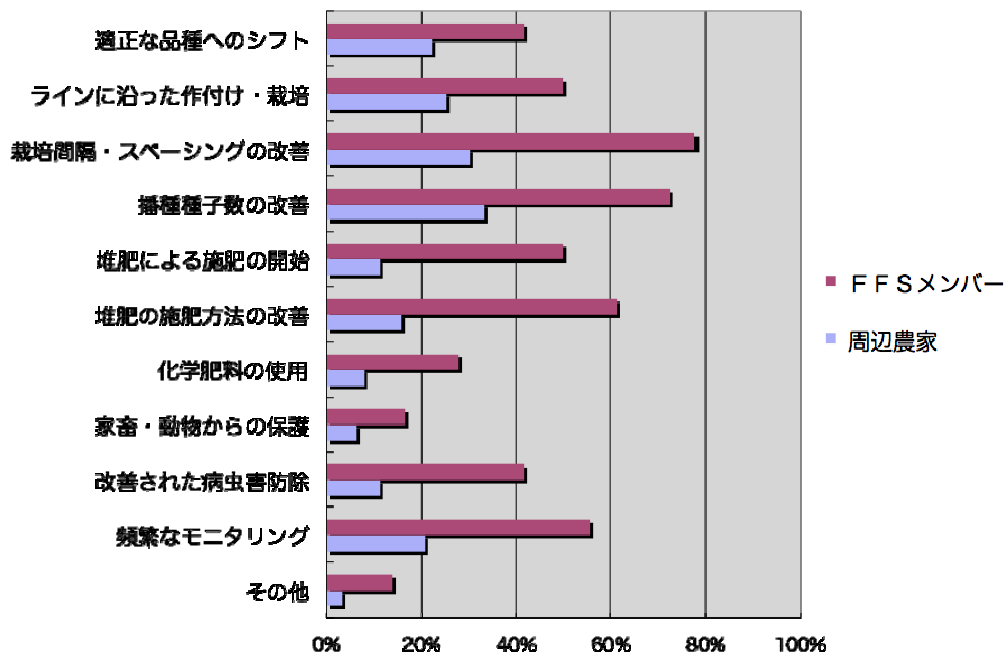
現在、計画しているのは苗畑とマンゴー果樹園の拡大だ。苗木生産は生産が追いつかないくらい需要があるが、これまでは資金がなくて生産規模を拡大することができなかった。今は個人で売っているが、ネットワークを通じて出荷すれば、もっと良い条件で販売できる。

マンゴーについては、土地は十分にあるので、融資を受けられたら、メンバー1人当たりあたり 0.5 エーカーの果樹園を作り、それぞれ 40 本の改良種のマンゴーの木を育てる予定だ。改良種のマンゴーは Farm Concern International (FCI) という NGO が買い取ってくれることになっている。FFS ネットワークに参加してよかったことは、SCBFFE プロジェクトの支援でエクイティ・バンクの人がローン管理について研修をしてくれることだ。以前はお金を借りるのは怖くてできなかったが、今は不安はない。

これからもグループ活動を続けていきたいし、いまだネットワークに加入していない FFS 卒業グループにはネットワークの利点について紹介していきたい。

#### (1) 農業技術の変化

図 2-7 は中間評価で調査された第 1 ラウンド(2004-2006)の FFS グループのメンバー 36 人及び、周辺農家 63 人の調査結果をもとに算出した FFS 後の新しい耕作技術の導入度である。主とし播種の間隔や播種数、堆肥の施肥方法を中心に新しい技術が取り入れられている様子が分かる。周辺農家でも導入農家の数は FFS メンバーほど多くはないが、重要な技術が着実に浸透していった様子が伺える。この周辺農家への影響については、すべてが FFS を通じてもたらされたものなのかは明確ではないが、対象地の農民がほとんど技術的なインプットを受ける機会がないことを考慮すると、FFS 以外の大きな要因があったとは考えにくい。

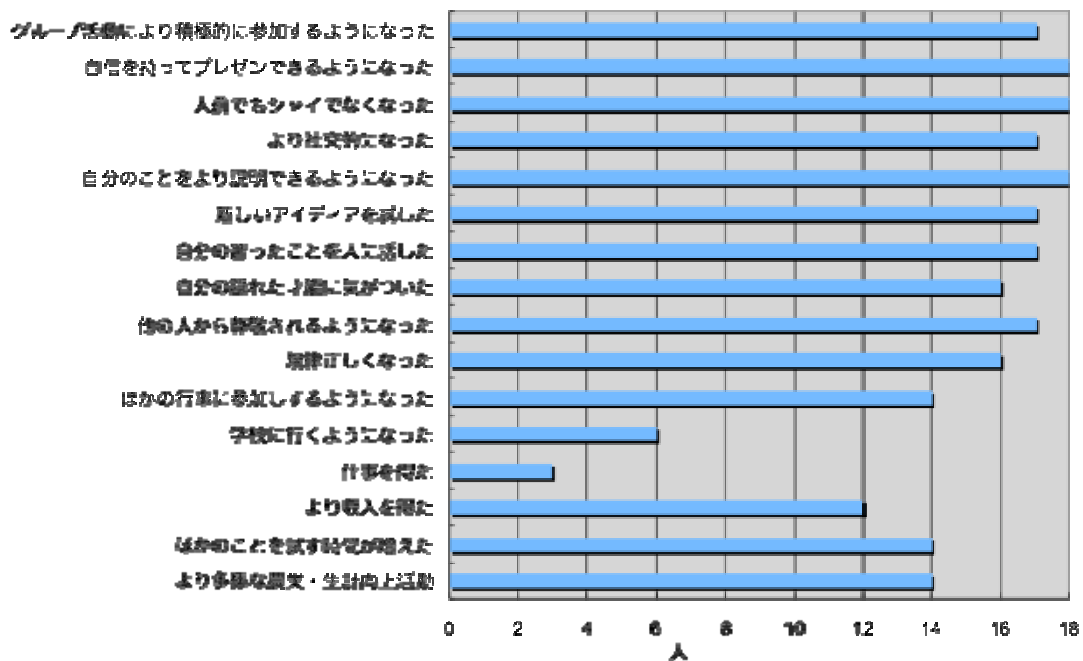


中間評価調査時(2006)の FFS 卒業生 36 人の聞き取り調査結果より

図 2-7 FFS メンバー及び周辺農家による新たな耕作技術の導入率 (FFS 後)

## (2) 農民の変化 ～ エンパワメント

FFS は技術普及の手法であると同時に、農民のエンパワーメントのためのプラットフォームであることも認識されている。プロジェクトでは FFS を実施していくことによってどのように農民自身が変わったかを把握するため、卒業後の FFS の代表者を集めて経験共有ワークショップを実施していた。また、図 2-8 には、2006 年 7 月に実施された中間評価調査時の FFS 卒業生への聞き取り調査で得られた農民のエンパワーメントに関する自己分析の結果をしめしている。「積極性」、「社交性」といった態度の変化の他、「自分の才能に気がついた」「人から尊敬されるようになった」といったエンパワメントにかかる考え方の変化や、「習ったことを人に話した」「新しいアイデアを試した」など、知識や技術の普及に関する回答が見られる。



中間評価調時(2006)の FFS 卒業生 36 人の聞き取り調査結果より

図 2-8 農民自身に起きたエンパワメント関連の変化(自己分析)

### (3) 普及員の変化

毎年実施された経験共有ワークショップでは、FFS を通じた普及員自身の変化についても自己分析をしてもらった(表 2-5)。プロジェクト専門家の観察によると、実際に FFS をファシリテーションした普及員の変化は明らかで、プロジェクト開始当初、農業関係のコンポーネントを普及に含めることに反対していた森林官が、逆にその必要性を説いて回るようになったり、農民自身の決断を尊重するようになった。また、ワークショップでいつも休憩時間を待ち望むばかりだった者達が、遅くまで作業を続けることを厭わなくなったという。こうした普及員の仕事に対する姿勢の変化は、エチオピアの普及員にも見られた。

報告者が KFS 本部で元プロジェクトマネージャーである現普及担当副総裁に聞き取りを行った時も、FFS を通じて KFS の普及スタッフの意識が変わったという回答を得た。元プロジェクトマネージャー自身、以前は、自分達の方が当然農民より知識があると思っていたが、自分が知らないことを農民が知っていることに驚いたと言う。「FFS のファシリテーションは知識を教えるのではなく、農民の持つポテンシャルを引き出すことだ」「FFS によって現地に適した技術開発・普及の主導権を農民が握るようになった」とも述べている。

また、カウンターパート機関レベルの成果としては FFS の企画・運営・実施を通じてノウハウを身につけた職員が、自ら普及員にファシリテーション・スキルの指導が

できる準マスタートレーナーレベルに達している。彼等は第三国専門家としてエチオピアのプロジェクトに派遣され、ファシリテーター研修と補強活動の指導も行っている。

表 2-5 普及員自身に起きた変化（自己分析）

FFS 実施以前	FFS 実施後
普及に関する乏しい知識	FFS アプローチによる普及手法の修得
他のセクターに関する知識の乏しさ	関連するセクターに関する幅広い知識の習得
不明確な業務内容、少ない仕事量、いつも怠惰	明確な業務内容、無駄な時間が減った
時間とリソース管理が甘かった	時間とリソースの適切な管理
他の関係者との協力関係が少ない	他の関係者との協力関係が深まった
仕事に対する満足感が低い	結果を重視した仕事に対して高い満足感
普及員は先生	ファシリテーションの方法を学んだ
農民グループの役員とだけ接していた	農民グループ全員と接するようになった
農民が知っていることについて尋ねたことはない	農民も知識の源だと分かった
農民グループに対し説明責任や透明性がなかった	予算管理の透明性が増し、参加型で意思決定をする
自己表現が下手で社交性に乏しい	自己表現が出来て、社交性が増した
他の部局の同僚に自分のことを知られていなかった	他の部局の同僚の間でも自己のイメージが改善した

#### (4) その他のインパクト

この他にも FFS を導入したことで、プロジェクトが当初想定していなかった正のインパクトも生まれた。前述したとおり、KFS では FFS 手法による社会林業普及がスタンダードな普及パッケージとなり、通常予算による FFS 実施が継続されている。公社本部内で FFS の認知度を高め、メインストリーム化への道筋を開いたのは、プロジェクトマネージャーの功績が大きい。

さらに、2006年3月から開始された AfDB の資金援助による GZDSP<sup>57</sup>では、その計画策定段階から FFS 手法導入の働きかけを行った。AfDB のプロジェクトでは、ケニア中東部から西部にかけて森林地域のバッファゾーン周辺に居住する農民を対象に、農地林造成とウッドロットの促進、IGA などの普及に、本プロジェクトで開発した FFS 普及パッケージを活用している。

<sup>57</sup> 2006年3月からアフリカ開発銀行の支援により、ケニアの高地水源林を擁する4県(セントラル、イースタン、リフト・バレー、ウエスタン)で実施されている。プロジェクト目標は、森林復旧と保全による環境保護、及び森林地帯近隣住民の生計向上。主に3つの活動コンポーネント(天然林保全、緩衝地帯流域管理、森林地帯近隣コミュニティ支援)からなり、特に3つめのコンポーネントでFFS手法が導入されている。

また、前述した世界銀行の JSDF による SCBFFE が承認され、ISFP の FFS 卒業グループのネットワーク化とファームフォレストリービジネス支援が始まったほか、エチオピアでは次に紹介する「ベレテ・ゲラ参加型森林管理プロジェクト」の第2フェーズにおいて、2007年から森林優先地域内の住民に対して IGA 支援のため FFS による技術普及と住民組織強化支援が行われた。

さらに、ナクル湖西部に広がるマウ森林地帯を擁するケリチョ県において、FAO 独自の技術協力プロジェクト (Technical Cooperation Project : TCP) である SLDP が形成され、2010年1月から2011年12月までの2年間で実施された (事例2-1参照)。この FAO プロジェクトは、コミュニティ森林管理組合 (Community Forest Association : CFA) に参加し、森林保全活動に協力することに合意した住民グループを対象に、FFS による IGA の支援を実施している点で、後述するエチオピアの参加型森林管理計画プロジェクトによく似たアプローチを採っている。

#### □事例2-1 FAO のマウ森林エリア持続的生計向上プロジェクト(SLDP)

マウ森林コンプレックスはケニア西部のケリチョ・ゾーンに位置し、国内の5つの主要な水源涵養林地帯の1つとして、リフトバレー地域西部のすべての主要河川の水源地にもなっている。近年、こうした森林保護区は、人口増加による集落の拡大、不法伐採、森林火災、過放牧などによる劣化が進んでいる。

FAO の SLDP は、森林保護区周辺に居住するコミュニティに対し、持続的な生計向上の手段を提供することにより、森林破壊に歯止めをかけることを目的とし、2010年1月から2011年12月までの2年間にわたって実施された。

このプロジェクトが形成された時には、KFS が JICA プロジェクトを通じて初めて採用した FFS 手法が、ファームフォレストリーの普及活動で既に大きな成果を挙げていた。そこで KFS は、半乾燥地域とは気候風土が異なるマウ森林地域でも JICA の FFS モデルを導入し、これに改良を加えた上で、農村レベルでの持続的収入向上事業を普及する方法を模索した。

SLDP プロジェクトでは、ケニアの JICA プロジェクトで林業関連活動向けに応用修正された FFS 手法を一部踏襲してはいるが、FFS の参加資格として CFA への加入が条件とされた点、森林リザーブ周辺住民の生計向上とエンパワーメントを通じて、森林破壊の圧力を軽減しようとした点などから、エチオピアのベレテ・ゲラ参加型森林管理プロジェクトと似たアプローチをとっている。こうした組織を超えた経験の共有が可能だったのは、JICA のケニア、エチオピアのプロジェクトを通じて、その普及戦略策定などに関し FAO の日本人専門家の支援を得ていたことがある。両機関のパートナーシップにより、FAO の知見が FFS の導入に活かされ、それにもとづく JICA のプロジェクト経験が、今度は FAO を通じて他のプロジェクトの設計に活かされていることが分かる。

FAOのマウ森林プロジェクトが、JICAの2つのプロジェクトと大きく異なっている点は、FFSを通じて実証される小規模事業(マイクロエンタープライズ)に対し、小規模ローンによる事業拡大(商業化)支援システムが、あらかじめプロジェクト設計に取り入れられていたことだ。これにはFAOが開発した“RuralInvest”という小規模事業企画支援ツールが活用された。FFS卒業後に小規模融資が受けられるということは、住民のFFS参加インセンティブに繋がるとともに、グループの結束強化に役立ったと考えられる。実際、マウ森林エリアのFFSでは、セッションの品質が高かったとされるJICAの半乾燥地FFSと比較しても、非常に高い卒業率(1年目で約9割)が報告されている。

最終的に2年間で24のFFSグループ、約700人が卒業したが、合計59件(グループ平均2件)のローンプロポーザルが提出され、総額570万シリング(=約570万円)の融資が実行されている。融資の原資はプロジェクトから、一般民間銀行であるエクイティ・バンクを通じて15%の金利でグループに貸し出される。返済された資金は、エクイティ・バンクとのパートナーシップで設立する「マウ森林保全基金」と称する回転資金に還元される計画である。

プロジェクトの支援でFFSメンバーは、銀行スタッフから事前にローン管理や帳簿作成など必要な研修を受けることができた。これによって以前は「借金をするのは懲罰だ」と思っていた住民のローンや貯蓄に対する考え方が変わったという。ローンは生計向上のためのチャンスであり、金利や返済期限を守ることの重要性も理解するようになり、個人でもローンを借りて事業を拡大する農民も増えたという。

ロンディアニ郡の“レモティットFFSグループ”は、プロジェクト1年次の2011年3月に卒業したが、男性17人、女性13人(合計30人)のメンバーが今もアクティブに活動を続けている。FFSではウッドロット、養鶏、苗畑技術などを学んだが、1年間のスクーリングではウッドロットの比較試験は十分でないと考え、現在でも、KFS普及員の支援なしで自主的に月2回のミーティングを続けている。FFSで習った養鶏ビジネスを拡大するため、プロジェクトの支援で事業企画書を作成し、26万シリング(約26万円)のグループ融資を受けることができた。そのお金でグループの鶏舎を改善し、雛鳥を購入して飼育している。今年になって一般銀行の金利が上がったが、プロジェクトを通じた金利は15%に据え置かれたので、とても助かっているという。それでも、金利を考えると2カ月の猶予期間を繰り上げて、翌月から返済を始めることにした。

プロジェクトのおかげで生活が良くなり、森林を守る重要性も理解できるようになった。苗木生産も始め、これまでに2万本の植林をした。